

コミュニケーションにおける「たとえ表現」

—その「豊かさ」と「ユーモア」に関する—考察—

山田 正人

はじめに

高月晋著『「たとえ」で学ぶ英語』（丸善ライブラリー）という本がある。これは、頭、体、動物などを用いた、さまざまな英語の「たとえ表現」を、その由来やエピソードを交え紹介した新書本である。英語を無視しても、読み物として、とても楽しく鑑賞できる優れたものだが、数年前に偶然手に入れたこの本は、今や筆者の座右の書である。

この本から筆者が学んだことを一言で述べるならば、「たとえ表現が持つ豊かさ」であろう。この「豊かさ」という言葉は「ユーモア」と表現してもよい。そしてその「豊かさ」や「ユーモア」こそが、コミュニケーションの道具としての英語を学ぶ際に、最も重要視すべきものであると筆者は信じて疑わない。

そこで、本拙論では筆者が鑑賞した映画に見られる「たとえ表現」と筆者が実際に使用し、好評だった「たとえ表現」を紹介しながら、それら表現がいかに英語の「豊かさ」と「ユーモア」を演出しているのか、およびそれら「たとえ表現」の習得が、英語のコミュニケーション能力の向上に、いかに必要であるのかという事実を検証したいと思う。

ラストシーンが語る映画『チャンス』の真相

1979年公開のアメリカ映画に『チャンス』と邦題が付けられた作品がある。監督はハル・アシュビー、主演は『ピンク・パンサー』シリーズで有名なピーター・セラーズである。以下この作品のあらすじを述べよう。

チャンスは物心付いたころから、とある大きな屋敷に住み着き、数十年間、庭師として仕えてきた。その素性は一切不明。教育も受けず、屋敷の外へ一歩も出ることなく、唯一テレビを友として生きてきた。そんなチャンスが、主人の死とともに閉鎖された屋敷から数十年ぶりに世の中へとさまよい出る。しかし「無垢の人」チャンスにとっては、世の

中すべての物事は喧騒以外の何物でもない。彼は自分の信ずることを口にし、行動するのみ。そんな彼は、ひょんなことから経済界の大物ベンジャミンと知り合いになる。ベンジャミンはチャンスの純粋さに驚嘆し、彼を大統領へと引き合わせる。大統領はチャンスが語った「庭木の話」を「経済論」と勘違いし、自らの演説にその言葉を引用。そのことが契機となり、チャンスは一躍時の人になり、ついには彼を次期大統領に擁立しようと画策する人達も登場するのだが、彼はそんな世の中の喧騒は「何処吹く風」と、ただ「そこにいるだけ」である。

多くの人は、この『チャンス』という映画を「心洗われる静かな名作」、もしくは「社会に対する皮肉」と捉えているようだ。筆者もその点に関しては全く同感である。しかし筆者の知る限り、“Being There”という原題が示す真意とチャンスの素性を見抜いた日本人は誰一人として存在しない。その理由はチャンスがラストシーンで行って見せた「水の上を歩く」(“walk on water”)という行為の内容が、あまりにも日本人には理解しがたいものであるからだ。それは、手元にある数種類の英和辞書で“walk on water”という表現を引いてみても、その表現の説明を掲載している辞書が『ジーニアス英和辞典』第4版(大修館書店)だけであり、しかもその説明が「水の上を歩く(ような不可能なことを行う).」としか書かれていないことから十分に理解できることだろう。この説明では、チャンスの素性とオリジナルタイトルである“Being There”の真意を解明することは到底、不可能である。換言すれば、この映画の真相を理解するには「水の上を歩く」という表現が何を「たとえ」ているのかを正確に知ることが必要不可欠であるのだ。

この「水の上を歩く」(“walk on water”)という表現が「たとえ」るものは、「キリストの奇跡」である。これは「ガリラヤ湖の岸に取り残されたキ

リストが、湖面を歩いて船上で待つ弟子たちの所へ行行った」という『新約聖書』『ヨハネの福音書』に描かれた奇跡を踏まえた表現であるのだ。

この故事を知っている者には、ラストシーンで「水の上を歩」いてみせたチャンスの正体が「キリスト」であり、さらには映画の原題である“Being There”（「そこにいること」）が、とりもなおさず「キリストの存在」を表しているということが即座に理解できる仕掛けとなっているのだ。「スーパーマン」などではなく「そこにいる」だけの存在が周囲の人々を啓蒙し、また癒す。キリストもそんな存在だった」という映画の真のメッセージが、ほんの数秒のラストシーンで明らかにされるのだ。

欧米人の生活に深く根を下した「キリスト教文化」を知ることの大切さを、この映画が採用した「たとえ表現」“walk on water”は教えてくれるのである。

みごとな「逆転の発想」を見せた『猿の惑星』

1968年公開のアメリカ映画に『猿の惑星』(“Planet of the Apes”)がある。監督はJ・シャフナー、主演はチャルトン・ヘストンである。この作品はシリーズ化され1973年までに合計5作品が作られた。1作目のあらすじは以下の通りである。

地球から320光年離れた「とある惑星」に不時着した宇宙飛行士であるテイラーは、仲間と共にその惑星の探検に出かける。しかし一人生き残った彼が見たものは、言葉を話し、人間そっくりな高い文化水準を持った猿たちの姿だった。囚われの身となったテイラーは、怪我を負わされ、さらには命の危険にもさらされるが、何とか生き延びる。猿たちの手から逃れたテイラーは、彼がNovaと名付けた美女を連れ、海岸沿いに馬を走らす。しかしそんな二人を待ち受けていたものは、この星が辿った悲惨な歴史を物語る遺物であった。その現実を前に彼はひざを折り泣き崩れ、その現実と運命を呪うのである。

痛烈な科学文明批判と現代社会に対する皮肉が、今なお色褪せることのない、映画史上に燦然と輝く屈指の名画である。人間と猿の立場が180度入れ替わるという「逆転」と、「すばらしきもの」と信じて疑わなかった「科学技術」が人類にもたらす「避けられぬ悲劇」を余すことなく描き切っている。

そんな深刻な内容を持つ同作品だが、「たとえ表現」を用いた非常にユーモラスなシーンが一箇所あ

る。猿たちに捕獲された際、銃弾を喉に受け、テイラーは一時的に声を失ってしまう。しかし、何とかして猿とコミュニケーションを図ろうと、彼は唇を動かし「自分は言葉が話せる」ということを、彼の「知性」に興味を持つメスのチンパンジー科学者ジーラにアピールする。彼女はテイラーの行動に興味を抱くのだが、そんなことに興味がない看守は、次の発言をするのだ。

“You know what they say. Human see, human do”

日本語字幕では「ものまねですよ」と翻訳されたこの表現は、公開当時には英語圏の人々に「大爆笑」を喚起させたであろうことは想像に難くない。なぜなら“Human see, human do”というこの表現は、“Monkey see, monkey do”（「猿見る、猿する」つまり「猿まね」）のパロディーであるからだ。

もし、猿と人間の立場が180度逆転したならば、日本語の「猿まね」という表現は「人まね」となることだろう。それゆえ英語の「たとえ表現」である“Monkey see, monkey do”も“Human see, human do”となるのは当然のことである。

「ものまね」を表す表現が、日本語、英語ともに、「猿」を用いるという事実も筆者には非常に興味深いことである。

また、この表現を筆者は意外なところで発見した。2003年2月20日付朝日新聞朝刊国際面に掲載された「追従ノン三様」と題された記事中の写真である。これは2003年当時「イラク問題でブッシュ政権の強硬姿勢に同調し、ペルシャ湾岸に特殊部隊など計2千人の兵士を送り込んでいるオーストラリアのハワード首相に対し、『まるで猿まね』と非難するポスターがシドニー市内などに登場した」（「 」内同紙記事）ことを報道する記事である。そして、その写真には、星条旗の「星の部分」（“canton”）に首相の得意顔をあしらひ、「線條部分」に“Monkey see, monkey do”と大書されたポスターが写しだされているのだ。いかにも人のよさそうな首相の丸顔と、「猿まね」という表現のギャップが醸し出す何ともいえない「おかしみ」が、読む人の笑いを誘う。為政者への痛烈な批判にも笑いを忘れないオーストラリア人の「ユーモア」を如実に表したなかなかの傑作だ。

このように英語圏では人口に膾炙した表現である

が、日本人英語学習者でこの表現を知っている者は、さほど多くはないだろう。なぜなら、前項の“walk on water”と同様、この表現を掲載している辞書は、筆者が知る限りでは『ジーニアス英和辞典』第4版および、『ウィズダム英和辞典』第2版（三省堂）のみであるからだ。

時速 80km で画面を疾走し続けた “Wildcat”

1994年公開のアメリカ映画に『スピード』（“Speed”）がある。ヤン・デ・ボン監督、主演キアヌ・リーブスである。以下にあらすじを述べよう。

ロサンゼルス市警の狙撃隊員であるジャック・トラヴェンは以前捕り逃した爆弾犯ハワード・ペインの挑戦を受ける。ハワードは、元爆発物処理班員であったが処理中の爆発事故により左手親指を失う。彼はその怪我が元で退職を余儀なくされるが、「市当局は、何も補償してくれない」と逆恨みし、警察にその矛先を向ける。ハワードは職務で得た爆発物に関する豊富な知識を駆使し路線バスに爆弾を仕掛ける。信管を速度測定器に連動させ、バスの速度が時速 50 マイル（時速 80km）を超えると安全装置が解け、その速さを維持しなければ爆発する細工を施す。ある乗客の発砲のため、運転手が被弾、負傷する。そこで乗客だった若い女性、アニーがスピード違反で免停中だったにも拘らず運転することに、バスに乗り込んでいた乗客達の運命はジャックとアニーに託されることになった。

犯人は状況に応じた的確な指示を、すべて携帯電話で送ってくるのだが、それを可能としていたのは予め車内に設置されたモニターカメラだった。ハワードはそのカメラを通し、バス車内を絶えず隈なく監視していたのである。ジャックはそのカメラの存在に映画の中盤で気付くのだが、その契機は一面識もないはずのアニーを “Wildcat” とハワードが呼んでいることにある。アニーの母校はアメフトで有名なアリゾナ大学であり、彼女は大学のシンボルである “Wildcat” が袖にプリントされたトレーナーを着ていたのだ。つまり、監視カメラを通してアニーがアリゾナ大学出身だということを知り、「アリゾナ大学出身のお姉ちゃん」という意味で、“Wildcat” と呼んでいたのだ。

では、なぜジャックは “Wildcat” という言葉をそれまでに何度も聞きながら、ハワードの呼びかけ

を不審に思わなかったのだろうか、それは “Wildcat” には「ヤマネコ」「野良ネコ」という意味の他にも、「突然怒り出す人」「意地悪女」という意味があるからだ。

ジャックは、ハワードが彼女のことを “Wildcat” と呼ぶ理由は、極限状態に置かれて苛立っている彼女を「たとえ表現」を用いて「怒りっぽい意地悪女」と「からかっている」と信じていたからなのだ。

「象さんジョーク勝負」と「ベーコンエッグ」

2001年夏と2002年夏、筆者は語学研修を受ける生徒の引率としてオーストラリアへ出張した。それぞれ3週間および2週間のホームステイをしたのだが、ホストファミリーおよび現地の教員との間での会話で筆者が使用し、非常に好評であった「たとえ表現」の例を紹介したい。

兩年とも同じ家庭にステイしたのだが、そのホストファミリーはみな気さくな人たちで、筆者のことを温かく迎え入れてくれた。特にアルコールが好きな筆者には、同じようにアルコール好きなホストファーザーがよくご馳走してくれたものだった。

楽しく杯を酌み交わした翌日、生徒の研修先に送ってもらう途中で、筆者は変わったものを見つけた。それはある店の屋根の上に乗った「ピンクの象さん」の張りぼてであった。その店がペットショップであることは、すぐ後にわかったのだが、そのとき筆者はホストマザーに次のように言ったのである。

“I’m afraid that I drank too much last night.”

怪訝そうに理由を聞く彼女に、筆者はこう答えた。

“Because I see a pink elephant flying over there.”

その答えに彼女は思わず噴き出していた。

蛇足ながら、このジョークの解説をしておこう。実はこの “pink elephant” には文字通り、「ピンクの象さん」という意味のほかにも、アルコール中毒患者などが見る「幻覚」という意味があるのだ。つまり、ペットショップの屋根に取り付けられた「実在するピンクの象さん」を、「昨晚飲み過ぎて幻覚が見える」と「たとえ表現」を用いて、筆者は冗談を言ったのである。

なお、これには後日談もある。この話を現地の教員数名にもしてみた。皆、ホストマザー同様大変面

白がってくれたのだが、その中の一人に、筆者は次のように切り返された。

“Your house must be very large.”

理由を尋ねる筆者に、彼女はこう答えた。

“Because you have to keep many pink elephants.”

「なかなかやるな」と感じた筆者は、すかさずこう返した。

“You are right. But the real problem is that the color of the elephants always turns into white.”

「『ピンクの象さん』が『白い象さん』(white elephant「無用の長物」)に変わるので困る」

このときも、彼女の爆笑を誘った。

「象さんジョーク勝負」、筆者に軍配が上がったことはここで述べるまでもないだろう。

また「たとえ表現」を用いて快適なホームステイへのお礼をダブルで述べたこともある。

一家で店を経営していた関係上、いつも朝は多忙を極める。朝食もコーンフレークに牛乳をかけて、各々が食べるという簡単なものだった。しかし、土曜日は店も休みである。ホストマザーがベーコンエッグを作ってくれ、日ごろ手をかけられないことを筆者に詫言った。そこで、筆者は次のように述べ、日ごろのホストマザーの精勤へのねぎらいと、その日の朝食である「ベーコンエッグ」への感謝の念を表した。

“Thank you for bringing home the bacon.”

“bring home the bacon”には、文字通り「ベーコンを家に持ち帰る」という意味と「生活費を稼ぐ」という意味があることは、ホームステイ中に読んだ現地の新聞紙上で知った。面白い表現ゆえに、「ぜひいつか使ってみたい」と思っていたところ、意外にも早くその機会を得ることができ、非常に嬉しかった。また筆者の礼に対し、ホストマザーが浮かべてくれた満面の笑みも、筆者にとっては忘れえぬ永遠の宝物である。

おわりに

「言語学習は、その言語の文化的背景の理解なくしては成り立たない」というものが筆者の信念である。長い歴史と文化が育んだ「結晶」が言語であると筆者は信じて疑わない。そういった中で特に「た

とえ表現」は、言語の持つ特質を如実に表すものと思う。換言すれば「たとえ表現」を深く知れば、それだけその言語を深く理解できることとなると思うのである。

また、「気の利いた一言」を述べることで会話相手を笑顔にすることも、コミュニケーションを行う上で重要なことであると思う。心通じる会話こそ、本当の意味のコミュニケーションであると思うからだ。また、そういった会話ができるようになることこそ、「言語学習」の醍醐味といえるのではないだろうか。

今回、この拙論で取り上げた「たとえ表現」の数は決して多いものではない。しかし、今後の英語学習の一助になれば幸いである。

参考文献・資料

- 高月晋著『「たとえ」で学ぶ英語』丸善ライブラリー (1996年)
- 松村増美著『私も英語が話せなかった』サイマル出版 (1978年)
- 日本聖書協会『聖書』新共同訳 (1991年)
- 小西友七／南出康世編集主幹『ジーニアス英和辞典 第4版』大修館書店 (2006年)
- 井上永幸 赤野一郎編『ウィズダム英和辞典』第2版 三省堂 (2007年)
- ハル・アシュビー監督 ピーター・セラーズ主演 DVD VIDEO『チャンス』ワーナーホームビデオ (2002年)
- フランクリン・J・シャフナー監督 チャールトン・ヘストン主演 DVD VIDEO『猿の惑星』20世紀フォックス ホーム エンターテイメント ジャパン株式会社 (2000年)
- ヤン・デ・ボン監督 キアヌ・リーブス主演 DVD VIDEO『スピード』20世紀フォックス ホーム エンターテイメント ジャパン株式会社 (2000年)
- 2003年2月20日付朝日新聞朝刊国際面

(学校法人中部大学 春日丘高等学校教諭)